サンフランシスコ日本語補習校の業務と課題

前サンフランシスコ日本語補習校　教頭
北海道網走郡大空町立東藻琴小学校　教諭　長　﨑　祐　紀

キーワード：補習授業校、管理職、初任者研修、巡回指導

1．はじめに

2012年、私はアメリカの西海岸、サンフランシスコ日本語補習校で仕事をさせていただけることになった。これを読んでいる方で、どのくらいの方が「補習校」というものをご存じだろうか？おそらく多くの方は、日本人学校はイメージできても、補習校はよくわからないのが実情ではないだろうか。私は海外派遣が決まった時には日本人学校に派遣になると思い込んでいた。補習校と決まった時は、一体どのような職務が待っているのか、不安が増大するばかりであった。

補習校に派遣される現役の教員は、私の派遣年度ではアメリカとカナダの6人だけであった。400を超える派遣教員の中で、6名しか派遣にならないということで、どのくらい少ないのかご理解いただけると思う。現在はどうやらシニア派遣が中心となっているようなので、現役の先生方の派遣は少なくなって（あるいは無くなって）いるようなので、とても残念に感じる。

派遣と同時に一般教員であっても教頭という管理職としての仕事が待っている。そんな補習校について理解を深めていただければと思う。

2．サンフランシスコ日本語補習校について

本校は、「理事会」「学校」「保護者（会）」によって運営され、1968年児童生徒数101名、教員5名でスタートした。その後の経済成長と共に学校規模も大きくなり、現在では幼児・児童・生徒数が1500名を超える世界第1位の補習校になった。日本国政府からは外務省より財的支援を、そして文部科学省からは人的な支援として教員（校長1名、教頭2名）の派遣を受けている。

サンフランシスコ地区とサンノゼ地区にそれぞれ幼稚部・小学部（同一校舎内）と中高部を抱え、4校で毎週土曜日に授業を行っている。開設教科は、

小1・2年生　国語②、算数、活動（生活科）4時間
小3～6年生　国語②、算数②、社・理科　5時間
中1～3年生　国語②、数学②、社・理科　5時間
高1・2年生　国語②、数学②、社会科　5時間

であり、年間授業時数は47日間となっている。現地校が夏休みに入る6月第3週から2週間は、日本の学校と同様に、連続して10日間の集中学習を行う。小中学生は、この集中授業を終えた後、日本の学校に体験入学する子どもも多い。

週1回の補習校ではあるが、日本と同様に入学式・卒業式はもちろん、運動会や文化祭などの行事も行っている。

3．派遣教頭の職務について

派遣されると同時に、教諭であった身分がその時点で教頭という職になる。管理職という立場の研修を受けないままの「教頭役」に責任の大きさに戸惑うばかりであった。派遣教員は時には教頭であり、時に教務、時には

指導主事の役割を担わなければならない。現地について２日後の入学式では、校長に代わって式辞を代読するという大役が与えられ、大変緊張したことをよく覚えている。

各校（幼小部２校、中高部２校）ともに主幹がおり、フルタイムで勤務する体制が整っているため、派遣の教頭職としての仕事は以前に比べてずいぶんと軽減されている。派遣の担当としてはサンノゼ地区とサンフランシスコ地区に分かれてはいるが、全体的に校長を含めて週ごとに巡回（ローテーションは規則的ではない）する形となっている。全体をもれなく把握し、派遣の力を均等に提供できる目的なのだと思うが、その反面、１つの地区に腰をすえての仕事ができないとも言える。例えば、子どもの情報や講師の情報などが希薄になっていくことがある。つまり、今週行った学校で何か問題があっても、次に来校するのは１ヶ月後といったことがよくあるため、細かな連絡・調整が必要になる。そのためオフィスでの情報交換は当然であるが、なるべく主幹との情報交換に努め、常に意識する必要を感じている。オフィスで行われるミーティングでは、生徒指導交流や講師の問題について、多くの時間を費やす。学校ごとに自分のノートにまとめ記録しておくなど自身の工夫が必要である。

その他、火曜日から金曜日はオフィスに出勤し、事務作業を行う。火曜日は、授業で行った各地区の教材や日誌などを回収したものを車に乗せて、オフィスに出勤するところから始まる。車の運転に関して言えば、アメリカで車の免許を取得したとはいえ、大都市のダウンタウンを１人で運転するのは、楽なことではない。いつも接触事故や違反に気を配りながらの運転であった。授業日に向けて金曜日には、多くの教材・プリント・日誌・備品を乗せて借用校に向かう。サンノゼ校にあっては、朝６時半過ぎには家を出て、ハイウェイを使って片道１時間をかけて通勤しなくてはならない。また、治安についても良いとは言えない。駐車の際は、車上荒らしに十分な注意が必要である。講師や保護者の車が被害に遭ったという話は何度も耳にした。常にここは日本とは違うのだと気を引き締めていなければならない。

さて、話をオフィスの仕事内容に戻すと、オフィスミーティング（授業日にあった事柄を交流し、校長から指導・指示・助言をしていただく）、講師との打ち合わせ、研修計画の策定・資料の作成、高等部入試問題作成、海外子女教育振興財団との連携、文集の印刷、各種作品展の応募、通知表印刷などなど実に多岐に渡る。朝から夕方までパソコンの画面を眺めながら、あっという間に１日が終了する印象である。

この職務の中で、校長との連絡調整をしつつ、管理職として教頭職をする仕事も大きいが、実務に多いのが現地採用講師への指導・助言などの研修業務という指導主事的業務が多くを占めると言える。

授業日にはその日の担当となった学校に赴き、職員朝会から勤務終了までその学校で過ごす。管理職としてその学校に出勤しているので、責任も大きい。緊張感をもったまま、講師の授業を参観したり、安全面を確認するため見回りをしたりして１日を過ごす。あまりに多くの学級があるため、１日の中で全ての学級を参観することはできないが、何クラスかを参観して、その先生方に授業の感想やアドバイスなどをしていく。担任になられている先生方の多くは、保護者の方であったり、他に主となる別の仕事をされており、副業として勤務されている方が主である。したがって教員免許を持っている先生は少なく、初めて教壇に立つという方も少なくない。そのため、学習の指導技術から生活指導、教師としての心構えなど多岐に渡り指導をしていく。直接面談をしながら指導する場合もあるし、メールや電話にて、お話しさせてもらう場合もある。悩みながら指導に当たっている方も多く、どのように適切なアドバイスをしていったらいいかを日々考え、子ども同様に講師の先生方に寄り添い、認めながら指導していくように努めてきた。

研修業務としては、初任者研修での講義や模擬授業でのアドバイスをはじめ、長期休業中の各種研修講座の講師として指導にあたることが中心となる。通常、日本でしてきた仕事からは離れるので、子どもたちとの触れ合いが少なく寂しい思いもあるが、教頭として全校朝会で挨拶をしたり、各種行事での講評・表彰をする際は、できるだけ子どもたちと接点をもてるように努力した。

研修業務の中でも、主な職務に模範授業がある。文字通り講師の方々の模範となるような授業を年６回（小学部４回、中学部２回）を原則として行った。直接会話することが少ない子どもたちの中に突然入り、「模範」と

されるような授業をしなければならないのであるから、そのプレッシャーは相当なものがある。初めて入る学級では、子どもたちの個性や雰囲気をうまく捉えることができず、なかなか思うように授業を展開できないことも多い。また、もともと先生方に「範」を示せるほど授業が上手なわけでもない。それでも先生方は日本の最新の教育技術を少しでも身につけようと瞳を輝かせて授業を参観されているので、さらに緊張が増すのである。今でもその緊張は忘れられない。

私自身は小学校で20年勤務してきたが、中学校での授業はこの模範授業が初めてであった。その上、本来入らないはずの高等部からの依頼（現社・現国・数学）があったりして、本当に戸惑った。派遣とはいえ、高等部での授業、指導、講師へのアドバイスなどは困難であるが、少しでも高等部の講師に役に立てるように、派遣教員も研修を進めなければならない。

また、指導面では周辺の「派遣のいない補習校」への巡回指導がある。平成26年度の本校の巡回指導はコロラド、デンバー、セントラルバレー（フレズノ）の三校の巡回を行った。(10月、11月)。私の場合派遣3年目であったが、初めて知らない学校への巡回指導となり、とても緊張しながらの指導となった。たった一人でアメリカの国内航空線で出張しなければならず、心細く不安な旅である。しかし、行った先々で感謝してもらえたことはとても嬉しかったし、自分にとっても良い経験となった。

またそこでは素晴らしい人々との出会いがあった。巡回をする学校は、サクラメント、コロラド、デンバー、ラスベガス、セントラルバレーの補習校が対象となる。いずれも日本からの派遣教員はおらず、現地の邦人団体・日本人会が作っている私立の学校である。どこも、講師の研修意欲がとても高く、保護者の教育に対する関心も同様に高い学校ばかりであった。毎年巡回指導に伺えるというわけではないが、できるだけ希望に添えるように努力していく必要がある。

西海岸の現地採用講師が集まっての研修会もあり、校長を含めた派遣教員が講師として現地に赴く機会もある。

4．現状の課題

① 子どもの入学増加に伴う学級増に、講師の人数が不足している（講師を希望する人や、講師としてふさわしい人材の不足)。それでも、順次補充してもらい、代行・専科などの仕事から入ってもらったり、次年度の担任要員として確保したりしている（平成26年度の初任者研修は既に6回、それに伴う模擬授業も6回実施)。また、採用となっても、実際に教壇に立った後、やはりできないといって辞めていく講師や、明らかに仕事に向いていないと判断される講師もおり、指導している我々にとっても、現場の講師陣にとっても大きな痛手であり、いかに対応していくか大いに悩む部分である。

② 学校規模が拡大しており、校舎の借用が難しくなってきた。どんどん生徒数が増えてきているため、人数が収まる教室数が足りないのが現状である。その上、各地区のディストリクト（教育委員会的組織）も我々のような外部団体に公立の学校を貸すことを渋り、借用は現在ますます難しくなってきている。現在は幼小部の1校は私立の学校を借用している。教室や学校環境が清潔で使いやすく、講師や父母からも好評であるが、借用料が公立の中学校・高校に比べて高いのが問題である。

③ 日本で使用している教科書を使って学習しているが、日本と同様の内容を年間47日で身につけるのは、そもそも無理がある。帰国した際に、スムーズに学校に戻れるような学力を身につけさせるということは、とても難しいと言える。カリキュラムを工夫したり、指導すべき内容を絞り込んだりと工夫して実施しているが、どうしても講師からは同様の悩みが聞かれる。「指導時間が足りなくて、力をつけさせられない。どうしたらよいか」という声だ。引き続き工夫をしながら、学力向上に努めていかなければならない。

5．おわりに

この３年間でかけがえのない経験をすることができた。今まで自分がいた立場とは違った立場で仕事ができ、いろいろな見方ができるようになったと思う。仕事を抱えながらも、毎週10時間の教材研究をして、ひたむきに、熱心に授業に臨む講師達の姿に、日本の現場で働いていた自分の姿を重ね、恥ずかしくなったものだ。海外で日本の子どもたちのために、一生懸命頑張っている人々や子どもたちの姿を、いろいろな場面で伝えていけたらと思っている。もし派遣される機会を得ることができたならば、この素敵な仕事にぜひ多くの方に携わっていただきたいと願う。